

第一章 文法事實の成立と其の根本義

一

文法學は、文法の事實を體系づける學的勞作である。即ち、雜多な文法的現象の中に何等か一般的なものを求め、之を手懸として次第に脈絡ある聯關に構成し、統一ある文法體系として認識する作業である。文法の體系化を圖らんとするものである。

然らば文法とは一體如何なる事實であるか。文法學の研究對象である文法の事實とは、如何なることを言ふのであるか。文法といふことは如何にして成立し、且その根本義如何。文法は言ふまでもなく、言語の内部に成立せる何等かの事實でなければならぬ。文法は言語運用の法であると謂はれてゐる。我々が言語を使つて様々の思想感情を表現してゐるのであるが、文法といふのは、かやうな言表に於ける言葉遣の法、語句を動かす手順方式であると考へられてゐる。それは兎も角として、文法は言語の内部的事實であり、語彙と共に言語の一屬性であることは疑ない。文法は言語事實の一部面として、否第二の言語或は高次的言語とも言ふべきものとして發達して來たのである。

言語とは如何なるものであるか。之に就いて從來色々に説明せられて來てゐるのであるが、要するに言語は、言ふといふことのために此の世に成立してゐるのであるから、之を根本的に解決せんとするには、どうしても先づ言ふといふ事柄を適確に擱んでかゝらねばならぬ。さうして此の言ふといふことから、言語の本質なり根本機能なり存在理由なりといふものを割出して行かねばならぬと思ふ。

言ふといふことは、我々が普段、朝夕の挨拶を交したりお世辭を遣つたり、諸諺を飛ばせたり擲論を放つたり、口論をしたり哀願したり、世間話をしたり演説をしたり、或は消息を交したり寄稿したり、著作をしたり日記を誌したり、詩文をものしたりするやうなことを一括した概念である。語るとか話すとか述べるとか喋るとか、或は綴るとか録するとか詠するなどと謂はれてゐることを總て言ふことであると考へるのである。かやうな言ふといふことを一般に如何に考ふべきであらうか。私は之を先づ一種の行動と見るのである。我々の日常生活に於ける種々の行動現象の中の一つであると考へるのである。謂はゞ言語行動とも言ふべきものと考へたいのである。

此處に於て、行動といふものの本質を先づ知つてかゝらねばならぬ。行動とは如何なることであるか。

行動は無論この世界に於ける現象であるが、單なる状態とか様相などといふやうな靜的なものと

異なる何等かの動的現象でなければならぬ。併し行動は單なる運動ではない。天體の運行や質料波の如き物理的現象は運動の模式的なものであるが、それらは無自覺的な機械的自然に過ぎない。主格未顯の動態に過ぎない。行動には主格的なものが顯現してゐなければならぬ。行動は自律的でなければならぬ。外的自然を超越せる内的理法により動き行くものでなければならぬ。宇宙時とは別個に成立する生命時により起滅展開する現象でなければならぬ。併し行動は單なる活動ではない。親が子を生み育て、子は異性を求めて次代に子孫を残す如き種的生命の持續展開や、個體內の代謝循環の如き生理的活動と行動とは同様に考へらるべきものではない。行動には何等かの目的がなければならぬ。意識的でなければならぬ。只管活動し働くといふことだけでなく、何事かを意圖し遂行する有意的現象でなければならぬ。併し作業とか作爲とか勞作とか製作とかといふ如きものは未だ眞の行動とは言へない。單に然することは未だ行ふことではない。行動には客體がなければならぬ。相手がなければならぬ。我に對立する汝がなければならぬ。動主に嚴然と對向して來る客者がなければならぬ。行動は主體間の力學的緊張である。此の意味から行動は常に社會的である。否、更に歴史的でなければならぬ。私が今こゝで何等かの行動を起すといふことは、横的縦的に張合ふ直接間接的な無數の汝と深い因果關係に於て行はれる、世界史的な事件である。行動の最高次の屬性は汝の存在といふことであり、行動の眞の意味は社會的歴史的であるといふ點に存する。人

間のみ眞に行動するのである。人間は行動的存在物である。

行動といふことは、我が汝に何事かを行ふこと、即ち對客者的に行ふことであるとすれば、言ふことが行動であるといふことは、單に私が獨で何事かと言ふのではなくて、常に汝に對して然々のことを言ふことでなければならぬ。言ふことは獨語ではなく對話である。我と汝とのダイアローグといふ意味に於て行はれるものでなければならぬ。我が汝に何事かと言ひ、汝が我が言ふことを聞分けるといふことによつて行はれなければならない。故に、私が今ここで何事かと言ふといふことは、私の何等かの意思を對者に了解せしめんが爲に然するのである。私が何事かを話さんとする時、常に相手の聞く作用を確認して立言するのであり、私が何事かを書表さんとする時、常に讀手の讀解作用を豫想して筆を執るのである。表出する働には如何なる場合と雖も何等かの形で了解する働が對立してゐなくてはならぬ。否、表出作用の前に已に了解作用が在るとすら考へなければならぬのである。かやうな事は、必ずしも言主と聽者とが現實に對在してゐる、所謂會話とか面談直談などといふ如きものゝ場合だけではなく、例へば噂話や蔭口や世評などといふものが、却つて反語的に人の心を強く動かすことがある。又消息文や通牒の如きものは別として、普通、書言語に依る詠歌作文述作等は誰彼といふやうに相手の明瞭でない場合が多いのであるが、之等も矢張、社會とか民衆とか學界或は文壇などといふ、謂はゞ幅廣い汝を意識して行ふのである。更に言へば、かやう

な對者は、只自己に外在してゐる場合だけでなく、第一の自己に對する第二の自己の如き場合も考へられる。我々が他人に見られて困るやうなことで、日記に誌して行く。又明日の私の爲に覺書を認めることもあれば、今しがたの私が現瞬の私に獨り言を言ひ聞かせもする。獨り言すら一種の對話と考へることが出来る。獨り言は單なる獨語ではなく、已に對話的性質を有してゐなければならぬ。而して此の獨り言を更に内化すれば、やがてそこに思索があり想像があり思念がある。思ふことは内に語ることであり、語るとは外に思ふことである。眞實なる思惟は常は對話的であり、敬虔なる對語には何時も眞理が流れてゐる。

言ふといふことは我が汝に何かを了解せしめんが爲に話すことであり、常に主客對立的に行はれ、而して一見さうでないやうなものでも、之を仔細に點檢すれば何等かの形で對話的性格を呈してゐるのである。かやうなことが又、それらの如何なる部分を分割してその斷片を取出してみても保たれてゐるやうに思はれる。例へば日常行はれてゐる談話や作文に於ける遂行部面、即ち話とか綴るとかといふ作用面のみを切放してみても、それは單に話し、單に綴つてゐるのではない。常に自身の話を聞き乍ら話し、讀み乍ら綴つてゐるのである。謂はゞ、話すなり綴るなりする働が只その表に立つてゐるといふだけで、その裏にはそれを聞き讀み監視批判する、より高次の我が對立してゐるのである。我々が話し乍ら一方に於て聞手となつて遂一之を聞いてゐるのであり、綴り乍

ら一方讀手の立場に立つて之を丹念に讀んでゐるのである。さうして、若し意に滿たぬやうな點があつたり、分りにくい所があつたり、誤謬があつたりすれば、再び言換へてみるとか書直してみるとか、盛に添削推敲するのである。かやうに、物を言ふとか綴るとかいふやうな積極的方面だけを見て、何等かの對話的な一つの緊張を保ちつゝ遂行せられてゐるのである。であるから、一言半句の末と雖も決して言主の主觀的な一了見で出來上るものではない。立言の奥は已に客觀的であり、社會的力闘である。又我々が他人の言を了解せんとする、受容部面に就いて考へてみても、我々は之を直下に領得するものでなく、その前に、意識的にか無意識的にか、他人の發する言を秘かに内話して見るのである。又文章ならば、之を心頭で綴直して見るのである。即ち分析綜合作用が働いてゐる。かやうにして一旦他人の手によつて構成されたものを、再度自分が構成し直してみることを再構と稱するのであるが、此の再構といふことによつて、與へられた他人の言を聞き或は讀みとるのである。再構といふことは、畢竟自己が言主に代辯して、自己自身に解いて聞かせることに外ならぬ。聞手が話手に立換つて話すことであり、讀手が書手に轉身して綴ることである。故に聞くといふことは話し乍ら聞くことであり、讀むといふことは綴り乍ら讀むことである。自己が自己に聞き自己を讀むのである。要するに、話すことでも綴ることでも聞くことでも讀むことでも、無限に連續する内的對話現象である。對話的自覺系列である。

言ふといふことが行動的であり對話であるといふのは、私が今こゝで相手に何事かを話すといふことの前に、私が相手の言に答へるといふ意味がなければならぬ。私が今何事かを相手に言はうとしてゐるのは、今しがた相手が私に何事か話した返答であるといふ意味がなければならぬ。しかも、その直後に相手が私に對し何等かの意思表示を行ふであらうといふことを豫想してゐるといふことがなければならぬ。つまり、私のこの今の立言には、その前と後とに相手方の意思表示が對立してゐなければならぬ。然もそれは生やさしい存在ではなく、嚴として迫り來るものでなければならぬ。それが私が今こゝで言ふといふ行動を起す必須の條件であり、又屬性でもある。對話といふものは一般にかやうな構造を成してゐるのである。而してかゝる對話の單位的なものが入亂れ次續して、現實の複雑な對話現象を形成してゐるのである。私が今こゝで何事かを言はんとする時、只單に一人の相手だけでなく、前後左右に雜多の相手が種々の事を考へて控へてゐる。然も立言と立言との間には、様々の行動的のものが割込み對話活動と行動現象とが肩を並べ、モザイクのやうに張合つてゐる。社會とか歴史とかいふものは、要するに行動と行動との力學的世界であるが、言ふこともかゝる行動の一つとして、對話的に之等の間に伍して世界史的建設の一役を果してゐるのである。否、世界の文化史の大半は、無限に連續して行く對話現象によつて形づくられてゐると言つてもよい。歴史は神前に奏でられる民族的對話劇である。言ふことはそのプロットを決定して行く

科白である。

劇文學といふ文學形態は、かやうな行動的世界から直接的に生まれたものであるが、我が國中世文學の重要な一つのジャンルである連歌は、抒情文學を媒介として成立した特殊な對話的文學と考へられる。蓋し中世の如き行動主義的時代に於ては、一方能狂言のやうな正系的な劇文學が發達すると同時に、他方に又かやうなものが生まれ出でなければならぬ必然性があつたのである。隨つて時代が變轉して行けば、又發句などといふものがそこから獨立し、新興の抒情文學に相呼應する譯である。併し翻つて考へて見るに、連歌を生んだ和歌そのものと雖も已に唱和の文學であつた。和歌は抒情化されたる對話であり、又對話化さるべき抒情詩でもあつた。更に言へば、抒情文學そのものも自然や人生に對する一種の唱和であり音なひであると考へなければならぬのである。抒情といふことにも對話の意味がなければならぬ。敘事は抒情に比して一層非行動的であると言へよう。併し戰記物語などは、謠曲のやうな劇文學と稱せられるもの以上に劇的であるとさへ考へられる。然も戰記は單に劇的場面の連珠であるといふことばかりでなく、敘述の一齣々々そのものが已に劇的緊張を以て相對立し力闘してゐるのである。或は又連俳から發句が完全に獨立し壓倒的なものとなると共に、俳文と稱する敘事風のもが成立して、連句的附味がかやうなものの上に躍動するやうになつた。即ち連歌に於ける對話性が、俳文では敘事の運びに轉身してゐるのである。敘事とい

ふものも、普通に考へられてゐるやうに非行動的なものと斷じ去らるべきものではなく、謂はば文脈的對話とも稱すべきところに一種の行動性を認めて行かねばならぬと思ふ。殊に眞摯なる推論の敘述は、常に我を省み神に質し、人生を案じ宇内をかけ廻り、對問辯證息むことを知らざるダイアレクチケーである。總て文章は行動世界的繪卷である。文章の上に連續し接踵する立言と立言とは、相互に微妙なる對話關係に置かれ、前言は後言を豫想し後言は前言に對へ、かくて綴り行かれる章篇は實に一小宇宙を形成するのである。創作といふことは、かやうにして眞の行動的世界が創造せられて行く作業に外ならない。

以上の如く言ふといふことは常に行動的であり對話的である。その内に省みても外にくゞり抜けても、何等かの形で我に對向する汝が附纏つてゐる。何事か言はんと欲すれば、先づ要求せられるものは行動性であり、我々がもの言ふ時、常に社會の上に立ち歴史を動かしてゐるのである。眞に言ふ人は眞に行動しなければならぬ。言ふことは握手でもあり命令でもあり鬭争でもある。故に言ふことは言語行動であると言ふのである。

二

言ふといふことが行動であると言つても、單なる行動でないことは勿論である。例へば、與へる

とか奪ふとか交換賣買などの如きものと類を異にする行動でなければならない。言語行動は物的行動ではなく心的行動の一つである。言ふことは我と汝との物の間柄でなく、心と心との交渉である。心的交通である。併し心の在態は物の如く顯ではない。暗い物質層の爲に幾重にも押隔てられてゐる。そこには互に相まみえる爲の窓が一切設けられてない。個々の心理は全く連續するすがなきモナド的散在とも考へられる。我々は常闇に面して對立してゐるとも言ふべきであらうか。かやうな我と汝との間に、如何にして心的行動といふ如きものが成立し得るのであらうか。我が汝に如何にして物言ふことが可能であらうか。それは勿論物を隔てた間接的行動であらうが、かく物を隔てゝ心の交渉を如何にして爲し得るであらうか。

物を隔てゝ心と心とが交渉する心的行動は表現によつて可能である。随つて心的行動はいつも表現行動でなければならぬ。表現とは如何なることであるか。表現とは物と心との統一である。勿論物と心とは全く相矛盾する對立的存在である。物は心に至ることも出來ず心が物に至ることも出來ない。物には物自身の本然があり心には心自身の本然がある。物と心とは全く相反するもの、非連續的なものと考へなければならぬ。兩者の間に絶對の斷絶がなければならぬ。絶對的否定關係でなければならぬ。かやうに非連續的な物と心とが否定を超えて直ちに連續的となるとところに表現といふことがあるのである。全く相反する物と心とが直下に一體となるとところに表現がある。表現は

矛盾の自己同一に成立するのである。絶対に相容れることの出来ない物と心とが即一するところに表現があるのである。所謂、物即心心即物である。

かゝる表現の考へ方を徹底すれば、この世界に成立する物象の總てが、何等かの意味に於て表現ならざるはない。例へば自然界の如きも單なる物質自然ではなく、表現と見ることが出来る。東洋的な自然觀といふのはかやうなものである。併し心的行動を可能ならしめる表現は常に作爲的でなければならぬ。製作的な表現でなければならぬ。一般に、表現作用と稱せられるものでなければならぬ。表現作用とは如何なるものであるか。

表現作用とは、表現が意識的に遂行せられることである。顯ならざるものを顯にする作用である。顯ならざるものとは言ふまでもなく我々の主觀的な心的現象の如きものであるが、それは單に非表現的なものと言ふことは出来ない。全くの非表現的なものは實在性なきものでなければならぬ。我々の意識現象はそれ／＼何等かの形態をとつてゐる。思想の如きものも常に内的形象ともいふべきものに發展してをり、情意の表出に至つては、知性の介入せざる限り直接的である。主觀的心理と雖も決して非表現的ではないのである。只心餘りて姿足らざる表現の缺如態に過ぎない。非表現的ではなく、一般に未表現的なのである。不完全、未發展なる表現態として在るのである。故に顯ならざる心の状態といふのは、現るべくして未だ現れ得ざる、問題の表現物と見なければなら

ぬ。かゝる意味に於て顯ならざるものを顯にすることは、その缺如面を補足することに外ならぬ。併し補足すると言つても、木に竹をつぐやうに、只心象に物象を繼ぎ足すことではない。かやうなものは何物でもない。無意味な業である。さらばと言つて、主觀的な内的形象は外界の物象に結び付かざる以上、如何に捏廻してゐても依然として不十全なる表現態である。未表現的な日蔭者である。主觀的精神はどうしても其の境を越えて外に出るといふことがなければ、絶對に客觀的精神となり得ない。心が眞に物に出なければならぬ。物といふのは單なる物質ではない。物一般ではない。かやうな物は考へられた物であつて眞に實在する物ではない。物は少くとも物象でなければならぬ。何等かの意味に於て常に表現でなければならぬ。併しそれは、言ふまでもなく我々の作爲によつて成れるものではない。意識的な表現作用の介入せざる自然的表現である。故に内的形象としての心的現象と反對の意味で、表現の缺如態と見なければならぬ。勿論自然的物象の中にも、明媚なる湖沼、雄大豪壯なる山嶺、或は松風の音、春の小川のせゝらぎの如く、そのまゝの姿が我々の美的感情を十二分に満足させるものもあるが、併しそれとても、藝術家の良心を以てすればまだ、彫琢を施さなければならぬのである。矢張問題としての表現物に過ぎない。主觀的精神と同様客觀物も未だ眞に表現せられたものではない。所謂客觀的精神ではない。物象は之を表現物たらしむべきものとして常に我々に與へられるのである。例へば一塊の大理石の如きものでも、之に鑿を加へること

によつて何等か特殊な彫像となるべき物象として與へられるのである。宗教的境地は別として我々が作爲する人間としての立場をとる以上、物象は總て未成の表現物である。完成されなければならぬ、表現の缺如態である。而してそれは、心的部面の補足を必要とする缺如態である。かゝる表現の外的缺如態としての物象に、彫琢を加へ作爲することによつて、外にタンジブルな精神構造を形造り、表現の内的缺如態としての心象を、この客觀界にまぎ／＼と現出せしめる作用が表現作用である。故に表現作用は、表現の内的缺如態と外的缺如態との相補的關係を媒介する作用に外ならぬ。内的形象を外的物象の上に描出し、内を外に外を内にする働に外ならぬ。内的に發展して來た心的現象が舊き主觀的形骸を蟬脱し、内を越え外に出で、外的物象を新たな形象として行く有節的過程的表現の作用である。

表現作用は單に物を製作することでない。物を作ることは心を作るといふ意味のものでなければならぬ。客觀的精神を形成する作用でなければならぬ。故に表現作用には物を作り行く反面に、心の發展といふことが勝義に伴なつてゐなければならぬのである。ギリシヤ精神は石より藝術品を作りつゝある彫刻家であると謂はれてゐるやうに、表現作用は物を作り行き、物の上に自己の姿を見つめて行くことである。描かれた表現物は單なる物象ではなく、心の姿である。併し、表現作用は物の製作といふことを離れてあり得ない。外に形象を作るといふことは、表現作用の最も本質的な

作業であると言はねばならぬ。然らば表現作用に於て物を作るといふことは如何なることであるか。外的形象は如何にして作られ行くか。

物を作るといふことは、一般に物の結合關係を變ずることである。物の統體を解き、要素的なものに分析し、之を再び結合して、新たに別の物として形成することである。物を要素的なものに分析するといふことは、物を否定することである。一定の形相をとつてゐる特殊な物象を、質料としての一般的物質にすることである。具象的な物を抽象的な物にすることである。立體的な物の像を解體し之を平面上に羅列してみることである。併しかく言ふものの、必ずしも元素とか原子とかといふものに分析するやうなことを意味してゐるのではない。科學的操作はかやうな方向へ何處までも徹底して行かうとするものであるが、個々の事物を製作する技術は、只物象的統體の結紐を斷切し、之を自在に驅使し得る代用可能物とすればよいのである。かく一旦分析したものを結合して新たに物を成立せしめることは、物象性を肯定することである。平面上に散在する抽象的質料的な物を以て、立體的な物の像を創造することである。文化の眞義はかやうなところにある。

かゝる物の製作には種々雜多のものがあつたが、それらの中、表現作用は單に物を作ることそれ自身が目的ではなく、物を作ることとは心の像として之を作るのである。心的形態を形造るのである。かゝる表現作用の製作性は、自ら單なる物の製作と異なるところがなければならぬ。先づ物の統體

を解き質料的に抽象化せられた分析物と雖も、單なる物質としてではなく、何等かの意味に於て已に心的な相貌を呈してゐなければならぬ。質料的表現物とも言ふべきものでなければならぬ。例へば顔料とか石膏とか調音とかと言ふ如きものでなければならぬ。繪畫とか塑像とか音樂とかといふものは單なる物理的集積ではなく、かゝる要素的表現物を無數に組合せた群像的なものである。複雑な要素的表現物の構造體である。而して、深い表現であればある程、その要素的組合せが微妙であり、容易に内奥を視ふことを許さない。この世界を創造した神の攝理を揣摩することが出来ないやうに、優れた藝術家の表現的巧緻は、易々と之が觀破を許さない。究めれば究める程、そこに盡し難いものが残されてゐるのである。併し表現作用は一者の業ではない。神ならぬ人間の作爲である。人間の主體的側面は一者的であるかも知れないが、その基體的側面は共同社會的でなければならぬ。個々の我々は世界のペルスペクティブの一觀點の如きものであると謂はれてゐる。社會とか歴史とかいふものを離れて個人は存在しない。人間は常に個人的社會的在態でなければならぬ。故に偉大な天才の作品と雖も、縦その創意性に測るべからざる深度があつても、そこに又我々と共有的なもの、誰もが近づき得るものがなければならぬ。釋迦も凡夫の譬、如何に深い表現にも共通的なもの、マンネリズムと言つたものがなければならぬ。かやうなものの中、先づ考へられるものは、類型とか様式とかといふものである。併しこの類型とか様式とかいふものも、尙眞に社會的な

ものであると言ひ得ない。或特殊な流派や時代に固有なものである。藝術學とか文藝學とか稱せられるものはかやうなものを取扱ふと言つても、只そこに止まつてゐる以上は徹底した精神科學と言ふことは出来ないと思ふ。結局ふはくした觀念的力説に終るのではないかと思ふ。現代、自然科學者が物質構造の極限點に到達せんとして徹視的メスを砥ぎ澄ましてゐるが、精神科學的領域にあつても、先づその精神物の極限的なものを把握する道を開拓しなければならぬのではなからうか。然も精神構造の極限は物質構造のそれに比して著しく巨視的である。割に淺いところにも浮動してゐる。手取早く言へば、そこいらの熊公八公も結構巧みに之を繰つてゐるのである。何のことはない、精神構造の極限點などといふものは、白痴にあらざる限り誰もが自由に觸れてゐる事實なのである。只名前が嚴めしいに過ぎない。とは言ふものの、之を以て構築される精神的殿堂には、莊嚴目もあやなものから閑寂な奥ゆかしいものなど、その内容は實に際涯がない。

表現作用の製作性、即ち外的形象としての彫琢は、外界の雑多な物象から種々の要素的表現物を析出し、之を調和あるやう全一的に聯關せしめ、内なる心的活動と眞の相補關係に立たせることである。要素的表現物を以てする建築工程である。故に表現物を取扱ふ精神科學は、先づその要素的表現物の極限を究めなければならぬ。之に就いて思ひ出されるのは、クリスチャンゼンの情趣印象説である。それは、例へば黄色には快活とか活氣とか柔和とか温暖とか、又青色には寒冷とか空虚

とか悲哀とか幽遠とか沈靜とかといふやうに、多くの色彩にはそれ／＼第一次的な感覺印象の外に之と關聯して第二次的な情趣印象とも言ふべきものが伴ふと言ふのである。かやうなことは色彩ばかりではなく、線にも面にも立體にも、音の高低強弱或は音色音律、音相其の他總ての物象又は物象の斷片に於て認め得るのである。表現といふことを眞に徹底的に考へて行かうとするには、どうしてもかやうなものの中へ頭を突込まなければならぬのではなからうか。我々の外界は一面單なる物質自然の現象界であるが、他面又かゝる情趣印象の如きものを伴ふ表現的な質料によつて充たされた世界である。表現作用の外的形貌は、この世界に於てかゝる質料的な要素表現物を析出し、之を次第に全一的な纏に作り上げて行くことに外ならない。かやうな表現的質料物の極限形態は一般に如何なる性格のものであるか。私は之を廣義の記號性であると考へるのである。表現素の極限點には常に記號的性格のものがあると思ふのである。勿論記號性と言つても、現在然稱せられてゐる標號合圖信號、或は文字や言語や學術記號等の如きものと直ちに同一視しようとするのではない。併しかやうなものと雖も、その根源は實はかゝるところに在るのではなからうか。現在普通に記號と稱せられてゐるものも、かゝる根源記號とも言ふべきものから發出してゐるのではなからうか。

總て表現作用は單なる働ではない。表現作用は空拳を弄する如きものではない。そこには何等かの足場手懸と言つたものがなければならぬ。非合理的な核の如きものがなければならぬ。物理的現

象にしても、その究極に至つて矢張波動的なものに對し粒子質料の如きものの存在を認めなければならぬのである。併し表現作用の非合理的な核は單なる物質であつてはならぬ。それでは無意味である。何等かの表現的意義を有するものでなければならぬ。とは言へ表現作用的なものであつてはならぬ。物と心との生ける統一であつては依然として表現そのものに過ぎない。それは如何に微分的なものであつても、尙表現作用の究極的なものではない。可分析的である。分析の極限點に達したものではない。物と心との或種の關聯ではあるが、そこに作用性の働いてゐないものでなければならぬ。表現的微粒子でなければならぬ。表現的物質とも言ふべきものでなければならぬ。かやうなものとは抑々何であるか。それは表現作用の方向とダイメンションを異にする一種の表現的なものでなければならぬ。表現作用の方向を縱的とすれば之は横的である。縱のものを横にしたものである。表現作用の方向といへば個性的創意性であるが、かゝる個性的創意性に對し否定的に横並ぶ共通的習慣性のものである。個々の創意的製作を横斷する共通的な所與物である。表現作用を有さない他の動物は、只單にかゝる根源記號のまゝに一種の本能的な心的交通を行つてゐる。例へば蟻の言語とか鳥の囀りとか昆虫の鳴聲の如きものはそれである。故に眞に記號性に徹したものと云へば、寧ろ人間よりも、單に共通的なものしか知らぬ他の動物であらうと思ふ。人間は社會的である一方個人的であるだけ、一面かゝる記號性を逸脱し個人的創意の表現作用を行ふのである。然も人間は

只それのみに止まらないで、雑多な表現作用的な現象から、更に眞の社會的記號とも言ふべきものを成立せしめて行く。信號とか合圖とか文字とか言語とかといふものを成立せしめて行く。根源記號は動物的生命の必然的本具的記號であるが、社會的記號は人間的生命が必然的に生み出したものである。而して言語はかゝる社會的記號の主峰を成すものである。

以上の如く、我々は根源記號とか社會的記號とかといふ記號性を核として種々の表現作用を行ふのである。表現作用に於ける外的形象の製作は、外界からかゝる記號性を析出攝取し、之を眞の究極的な表現質料として形象を組立て彫琢して行くのである。而してかゝる外的形象の形成、即ち外に物を作ることは取りも直さず内の心を外に作ることに、顯ならざる心を顯にすること、未表現的なものを補足し眞の表現物とすることである。我々はかく表現物を形成することによつて心的行動を行ふのである。心的行動は表現作用によつて行はれ、表現作用は種々の記號的なものが核實となつて展開する。故に記號的媒介作用は心的行動に於て物質層を突破し我と汝とが交通する唯一の道である。言ふといふことは、かゝる記號性の王座を占める言語記號群によつて行はれる心的行動の一つである。言語的媒介作用によつて行はれる行動である。言語記號の働を核とする表現作用、即ち言表によつて相互の意思を通ずることである。言靈を生命とする行動である。

三

言ふといふこと、即ち眞に具體的な言語行動からその社會的連帶性歴史的對話性を解けば、個々別々の言表が抽象せられる。誰その話とか作品とかいふものが我々の眼前に散在する。次にかゝる言表を更に言主の個人的創意から開放すれば、單なる言語の働が抽象せられる。言語活動(Language)と稱せられるものはかやうなものである。我が國古來の言を以てすれば、それは言靈である。言表はかゝる言靈の働による表現作用であり、言語行動といふのは言靈の媒介作用によつて成立する心的交通である。言語活動は種々の言語的現象の最も純粹なる姿であり、廣義の言語學はかゝる言語活動を對象とするものである。併し言語活動の實在性は、それ自體眞に自律的であるとは言ひ得ない。自動的ではない。活動とは言ひ條、我々人間を離れては無意味な存在である。否、人間の機能としてのみ此の世に成立したもので、之を運用する人間がなければ言語活動といふこともあり得ない。言語活動を自律的生活體の如きものと誤認してはならない。言語の生命などといふことは一つの譬喩に過ぎない。言語活動は人間の一屬性であり、習性の如きものと考へなければならぬ。随つて言語活動は、個人的社會的在態なる人間そのまゝの形貌を呈し、一面人間の個人的創意性の面影とも言ふべき個人的側面を有し、他面人間の社會的連帶性の痕跡とも言ふべき社會的側面を有し

てゐる。言語活動はかゝる相反する二面の綜合的實在として、我々人間の心的行動の媒介的機能を果してゐるのである。而してその本質的部位は社會的側面として成立せる言語(Language)である。個人的側面として成立する言(Parole)は言語の利用であり、質演あり、偶然的部位である。言は言語の特殊的事例であり、本體は言語にある。言語行動は言語表現によつて存立し、言語表現は言語活動によつて存立し、言語活動は言語によつて存立する。言語は言語的諸現象の生命的核實であり、隨つてかゝる言語の真相を究めることは言語學の中心課題でなければならぬ。

言ふといふことは一つの行動であるが、物的行動と異なる心的行動でなければならぬ。而して心的行動は記號性としての物の媒介作用による表現的行動であり、言語行動はかやうなものの一つとして行はれるのである。併し言語行動は單なる心的行動或は表現行動ではない。心的行動の媒物となる記號性は種々の物象に於て見ることが出來、根源記號とも言ふべきものから種々の社會的記號に至るまで、雑多な記號的階層があるのであるが、言語行動はかゝる諸記號の王とも言ふべき、言語と稱せられる記號群の媒介作用によつて行はれるものである。言語する行動でなければならぬ。言語活動によつて成立する言語表現を介して爲される、相互の心的交渉でなければならぬ。かやうな言語行動の眞の媒物である言語とは如何なるものであるか。

我々が何事かと言ふ時、普通之を音に發する。音物象として相手に放出する。あらゆるものを音

に翻譯して我々はものを言ふ。音は言語活動の最も實質的な部分である。故に音を度外視して言語を考へることは困難である。併し音物象そのまゝが言語でないことは勿論である。音を考へることは言語を知る有力な助になるが、只それだけで言語の本質を解決することは出来ない。音は音波と稱する質料波によつて成立する一種の物理的現象に過ぎない。尤も、かやうな物理音が生ずることは物的自然の力的表現であると考へることも出来る。音響は宇宙のエネルギーの表れであると考へることが出来る。岩を嘯む怒濤や雷鳴地震噴火、さては川瀬のせゝらぎ松風の音、うたかたの消え行くはかなき音に至るまで、何れも天地自然の力の表現と考へられる。音の現象は自然の呻きであり叫びであり喜びであり嘯きであり歌聲であると考へることが出来る。併し物理音はそのまゝ言語とは言へない。單なる質料の波動は言語活動ではない。エネルギーの表現といつても言語といふことは出来ない。言語は内面的でなければならぬ。何等かの意味で、かやうなものを内に超えてゐるといふことがなければならぬ。人間的でなければならぬ。

音が生命體の特殊な發音器官の生理的活動によつて發せられるやうになつたものを一般に音聲と稱する。音聲は生命の媒介によつて外的自然音とは異なる特殊な音象として發せられるものである。物理音を超克せる生命音である。併し單なる音聲は未だ言語とは言へない。音聲は言語の原郷であり、言語は先づかゝる音聲に發せられなければならないものであると言へ、音聲そのものが直ち

に言語ではあり得ない。音聲は生物體に於ける一種の生理的現象の表れに過ぎない。生命の漠然たる顯現に過ぎない。狭蠅如す音なひに過ぎない。言語には何等かの意味内容がなければならぬ。

單なる音聲活動ではなく有意味的でなければならぬ。何等かの意味を表す爲に發せられるものでなければならぬ。併し音聲が種々の心的状態の表現となつた音聲表現の如きものと雖も未だ言語の域に到達してゐない。すだくとか嘯るとかといふやうな本能的な音聲は勿論のこと、有意的意圖的に發せられるものでも、音聲表現は總て言語といふことが出来ない。かやうなものは何れも言語の重要な資料となるべきものかも知れないが、言語そのものではない。寧ろかゝる音聲表現が次第に形象的に深まり藝術の方向に發展し、所謂バラッドの如きものとなつて音樂歌謠舞師等の原初形態を形造るのである。言語はかやうなものとは全く別な方向に於て成立して行くのである。

音聲表現には種々の段階があり單複さまざまであるが、今之を横斷的に見れば、大體主觀を表白する傾向のものと客觀を描出する傾向のものとの二類に分けて考へることが出来る。前者の中には泣いたり笑つたり叫んだり、或は咆哮歡聲のやうな表情的のものと、掛聲や呼應のやうな表決的のものとのある。之等は皆、しかとした情意の表現であるが、その外に談話の合間々々によく挿入される「えー」とか「あー」などの如きものに類する、只單に意識活動の持續を表示するに過ぎない放散的なものもある。後者の客觀的音聲表現には、先づ外的自然音などをその儘に描寫して行くオノ

マトベ的なものがある。例へば、鳥の啼く聲とか虫の鳴くねとか風の音水のたぎる音などをそのまゝ、自らの音聲を以て寫實しようとする如きものである。之等は擬音とか擬聲などと稱せらるべきもので、只管外界の音を在りのまゝ模倣するものであるが、更に進んでは外的現象の形狀様態或は態度等を音聲によつて象徴しようとするものがある。謂はゞ嚮のオノマトベ的手順を類推的に利用したものである。之等は擬容音乃至は象徴音など稱せらるべきもので、音聲表現としては最も高等なものと言ふべきであらう。併し、如何に高等なりとは言へ、音聲表現は音聲表現である。言語となるためには、之等のものは、如何にかして音聲表現たることを超えなければならない。

擬音や象徴音は知覺的印象を直接的に表出したものである。知覺も内向的な一種の表現と見るこゝとが出来るが、かやうな知覺的印象が音聲に憑依して外に顯れ出たものが、擬音や象徴音である。而してかゝる音聲群が逆に外から反射して來て内に凝固し、記憶に止められ永續性を得るやうになつたものが物の名である。原始人は山川草木鳥獸魚虫等、あらゆる外的自然の物象にそれ／＼特殊の名を與へ、かく命名することによつて、外界と結合し自らの心を豊富にして行つたものと考へられる。名は精神的物質である。心内に成立せる客觀物である。故に物の名の創造はやがてホモ・サピエンスの誕生と考へることが出来る。併しかゝる物の名も未だ言語とは言ひ難い。物の名は言語への一步手前であるが直ちに言語へ接續するものではない。又物の名が一般化し抽象的となつても

言語にはならない。それは科學的知性への道行かも知れないが、言語とは本質的に異なるものと見なければならぬ。物の名は、個人の心内に於て永續性乃至は時間性を得ることにより音聲表現たることを超えたやうに、更に百尺竿頭一步を進めなければ言語となることが出来ないのである。

種々の音聲表現が表現的に如何に深まつて行つても、物の名として内に永續性を得ても、又かゝる名が普遍的方向へ進化しても、言語の領域には到達することは出来ないのである。言語はかやうなものが社會的記號となつたものでなければならぬ。個人的創意性を超え、かゝる個人的創意的なものの媒物としての社會的記號でなければならぬ。物の名の如きは個人の心内で永續性時間性を得てゐるが言語は社會の共同物として歴史的傳承的でなければならぬ。社會心理學的物質でなければならぬ。現實社會に於て私が汝に何事かを物語り、又古典を繙き古人の言に聽從し、或は誠を孫子に遺すことの出来る社會的歴史的な共通物でなければならぬ。

かやうな言語は、音聲表現とか物の名とかといふものに比較するよりも、寧ろ物理的音響や生理的音聲などと比較して考へた方が適當であるかも知れぬ。即ち物的自然界に於ては最も客觀的なものとして種々の音響が考へられ、種的生命界には音聲が成立してゐると考へられると共に、歴史的共同社會には言語が成立すると考へるのである。音響は物的自然界の言語、音聲は生物的生命界の言語であるとすれば、言語は歴史的共同社會の聲々であり、とよめきであり質料物である。併し言

語は單に根源記號の如きものではなく、社會的記號の一つでなければならぬ。根源記號は自然の物象そのものが我々の表現作用に對し記號性を呈することを言ふのであるが、社會的記號はかゝる表現の個人的創意の製作を超え、社會的に生産せられた文化的記號でなければならぬ。社會的自然の所産物でなければならぬ。音聲表現とか物の名とかといふものは、根源記號よりかゝる社會的記號に至らんとする中間的過程現象の如きものである。一旦根源記號物が音聲表現とか物の名とかといふものに形造られ、かゝる表現物的統體から抽象化され一般化された記號物が言語記號である。故に社會的記號、取分け言語記號は根源記號物に比し極めて巨視的である。表現の巨視的要素物である。

言語といふものは單に音とか音聲とかいふものが、或何等かの意味内容を表現したものではない。かやうなものが、生ける表現作用的關係の緊張が弛び磨滅し忘却せられ、無意識的形骸的となり精神的物質の如きものとなつてゐなければならぬ。表現物の化石の如きものとなつてゐなければならぬ。道具化されてゐなければならぬ。併し言語は單なる物の名の境地を超えたものである。個人的心身を超越し集團社會に内屬してゐなければならぬ。單なる我的精神物でなく我と汝との共同財でなければならぬ。勿論言語の在態は個人の腦中に巢喰ひ、その發言中樞はブローカの所謂左額第三螺線部に在る。併しそれは單なる個人的所有物として然在るのではない。個人の身體の一部分でも

なければ生理的所産物でも心理的構成物でもない。個人の内部に存在する超個人的事物である。個人が社會から受容したものである。個人が歴史的世界の一角として共有せる社會面である。言衆の共同事物として個人の腦中にを座占めてゐる社會的所産である。一分一厘たりと雖も個人の自由にならざる公共物である社會からの預り物である。物理音が外的自然界に彌漫し廣布してゐるやうに言語は言衆各個の腦中に滲透することにより集團社會内に流布せる社會的物質である。生理音が種々の生命に共通な習性物である如く、言語は歴史的共同社會に特有な習慣體系である。

言語は表現の要素物であるが、單なる根源記號の如きものでない。併し又音聲を表現資料として個體の内部状態を表出した音聲表現の如きものでもなく、或はそれが内に固形するに至つた物の名の如きものでもない。言語は如何なるものと雖も、先づ社會的記號でなければならない。例へば主觀的情意の表出とか、擬音や象徴音などのやうに、外的事象の直寫とかいふやうなものでも、言語としての取扱を受ける以上は創意的表現物でなく、その社會に共通なものとして一種の記號物であるといふことが先決要件である。記號の本質構造は、ソッスール學派の人々も言ふやうに、能記(signifiant)と所記(signifié)との聯合體である。言ふまでもなく、能記といふのは記號の實質を形造る部分であり、所記といふのはその表示内容である。例へば「花」といふ語に就いて言へば、「ハナ」といふ連音の像が記號の實質的部面で能記であり、之に對應して聯想せられる花の概念が

所記である。記號の眞實體はかゝる兩部の聯合體である。即ち記號は單なる物でもなく心でもなく又物と心とが相即せる表現そのものでもなく、物と心との比例的關係物でなければならぬ。而してかゝる記號には種々のものがあるが、社會的記號は最勝義に於ける記號であり、言語はその王座を占むるものと言はなければならぬ。併し言語は單なる社會的記號ではない。言語は標號とか合圖とか文字とか音譜などと異なるものでなければならぬ。言語は單に個々の語の群聚ではない。言語は孤立的記號ではない。言語は文法的でなければならぬ。言語の最高次の定義は文法的記號といふことである。

四

言語は能記としての音映像と所記としての概念映像とが聯合せる社會的記號である。併し言語は單に個々の記號ではない。標號とか合圖とか信號などの如きものと同等に考へらるべきものではない。言語には個々の言語記號の外に文法が成立してゐなければならぬ。如何なる種類の言語と雖も文法を有しない言語といふものは此の地上には最早ないのである。文法の事實は言語と他の種の記號物とを區別する重要な條件である。文法が成立してゐるか否かといふことは、眞の意味の言語であるか、又それ以外の記號であるかといふことを知る有力な基準である。身振語などと稱せられる

ものは勿論眞の言語ではないが、身振にも一種の文法的萌芽が見えるところから斯く稱せられるのである。抱合語と雖も未開發的な種々の文法事實が連續記號の中に躍動してゐるのである。言語は常に文法的でなければならぬ。文法的段階に達した記號でなければならぬ。言語は廣い意味で一種の記號物であることは勿論であるが、それは單純に記號であるのではなく、文法的記號とも稱すべきものでなければならぬ。文法事實は言語の生命であり骨髓である。文法といふことを度外視して言語を考へることは出来ぬ。文法はその言語の主觀性とも稱せらるべきものである。故に様々の言語の性質を識別する最も有力な條件は、先づ文法事實の相異如何といふことである。文法は言語の性質を支配してゐる。然らばかゝる文法は如何なるものか。文法は言語の中に如何にして成立して居り、それは如何なる性質のものであるか。

言語が心的行動の媒介機能を發揮せる有様を言語活動と稱する。即ち精神質料として個人の腦中に潜在待機せる言語が、何等かの心的觸發によつて、社會的物象として心的交渉の媒介作用を爲し、言語行動と稱せらるゝ特殊な心的行動を成立せしめる總體が言語活動である。かゝる總體としての言語活動を社會的個人的要因により分析すれば、その社會面的事實として共通的な言語があり、個人面的事實として特殊的な言がある。随つて言語活動は言語と言との統一概念である。社會的個人の總體として眞に具體的な人間機能である。言語活動は又かゝる見方に縦斷して、外的方向と內的

方向とに分析して考へることも出来る。外的方向といふのは、言語の能記に規制せられた各人の音聲活動である。言語の能記は一定の心理的音映像であるが、かやうなものの指示するまゝに個人の發音器官の生理活動が行はれ、かくて物理的な音波に移行する方向である。内的方向といふのは言語の所記に規制せられた各人の精神活動である。言語の所記はその能記に對應して然るべき概念映像を成してゐるのであるが、かやうなものを足場手懸として心的活動が種々に展開し言語形象が成立して行くことである。一體音聲活動と心的活動とは、人間に先天的に附與せられてあるものである。聾啞は前者に甚だしい缺陷を有するものであり、白痴は後者に甚だしい缺陷を有するものである。之即ち言語活動の天賦的能力とも稱すべきものであらうか。併し此の兩者を結合することは直ちに言語活動ではない。音聲によつて心的内容を表出したものは單に音聲表現の如きものに過ぎない。言語活動は此の兩者の間に、社會的な記號物である言語の介入がなければならぬのである。言語活動の天賦的能力が、言語によつて規制せられつゝ發動することではなければならぬ。言語活動は單に音聲活動と心的活動との統一ではなく、外の方角には言語が音聲活動を規制し、内の方角には言語が心的活動を規制する二面相的制約活動と考へなければならぬ。言語は能記と所記との聯合體であるが、能記的規制が成立因となつて言語活動の外的部面が働き、所記的規制が成立因となつて言語活動の内的部面が働くのである。前者は言語活動の外皮としての發音的活動であり、後者は

その内實を形造る言表的活動である。言語活動はかやうな兩方向の統一活動であり、かゝる言語活動によつて我々の心的交通が種々に行はれることが言ふことである。

發音的活動は社會的な言語の能記面と個人的な音聲生理との統一であり、言表的活動も社會的な言語の所記面と個人的な形象心理との統一であるが、かゝる發音的活動と言表的活動との間に又音聲表現的なものが成立する。例へば語調とか口調とか朗讀法とかいふやうな言語活動の表情現象は何れもかやうなものである。翻つて言表的方面そのものも極めて複雑である。言表的活動は所記的規制によつて行はれるのであるが、その中孤立的な單一言語によつて言表が形造られる場合には、只腦中に在る個々の言語記號をそのまゝに放出して行けば大體に於てよいのである。然るに表出すべき心的内容が複雑であると、只單一言語を發してゐたのでは其の委曲を充分に盡すことが困難である。言表の其處此處にギャップが出来、意が餘つて来る。此處に於て個々の言語記號の所記的規制によつて表出する以外に、かゝる言語記號の結合體を以て表出しようとするのである。個々別々の孤立言語で表し兼ねる内容を言語の組合せ具合で表さうとするのである。言語の結合關係によつて單一言語の目から漏れた意味内容を拾ひ、その間隙を埋めようとするのである。併しかやうなものでも、單に表現の意味からのみ行はれるものであつたら、そこに働いてゐるものは表現の技術に過ぎない。個々人の主觀的恣意の如きものに過ぎない。又かやうなものが多少永續性を得ても、そ

こに文體 (Stil) の如きものが成立するであらうが、依然として主觀的特殊的である。併し、文法といふものもかやうなところに成立してゐるものと考へなければならぬ。言葉各個のかゝる主觀的技術性を超え、却つてそれに迫る法の如きものとなつたものである。併し法と言つても普遍的法則の如きものと異なる。結合關係が如何に論理的に妥當であつても、單にそれだけのものであるならば、そこに文法が働いてゐるとは言へない。只文法などを超えた普遍妥當性あるのみである。文法の法といふ辭は社會的制約といふ意味である。社會的法典として個人の言表的活動を規制する意味のものでなければならぬ。

文法は個々の言語記號の結合關係が、社會的要因の介入により言語面に内屬し、制約化せられるところに成立する。併し結合關係が制約せられると同時に、非結合關係も消極的に制約せられるのである。依存の裏には常に排他といふことがなければならぬ。連續が考へられると共に非連續が考へられなければならぬ。故に文法の事實は言語の結合終結に關する社會的制約であるとしなければならぬ。言語の斷續法でなければならぬ。我が國古來の言を以てすれば詞の切れつゞきの法である。かやうなものが言語に内屬する事實として、言語活動に於て専ら言の構築を規制し言表活動や複雑多様なものとするのである。故に記號がかやうな文法の事實を有するや否やといふことは極めて重大な意義を持つものであり、而して種々の記號中、言語のみ文法をその屬性とするものであり、隨

つて言語は有文法的記號として最も高次的な記號と言はなければならぬ。然もかゝる文法事實は、諸々の言語體系の本質的性格を表示する、言語の眞の主觀性とも言ふべきものである。言語を眞に體得し、その言語の堂奥に參せんとするには、かゝる文法事實の心髓を先づ把握しなければならぬのである。

文法が言語の連續斷止に於ける社會的制約であるといふことは如何なることであるか。之に就いて今少しく突込んで考へて見よう。文法は言語の屬性として高次的言語面とも稱せらるべきものであるが、言語活動に於てかゝる文法の活動が加はることによつて、言は單一言語の孤立的放出ではなく、種々の言語記號が互に相接踵し連續し或は斷止して、恰も言語的粗密波の如きものとして次第に展開する。かゝる言語的粗密波の密なる部分は連續性が強力に働いてゐるところであり、之に反し粗なる部分は斷止性が強力に働いてゐるところである。併しかやうなものの中にも、殆んど完全に斷止してしまつたものと、何等かの意味で連續してゐるものとに分けて考へることが出来る。即ち言語的粗密波が斷絶したものと未だ繼續中のものとである。何が故に斯く斷止し又連續するのであるか。勿論之は外面な發音活動の生理關係とか物理關係とかといふものに依ることもあるであらうが、今はそれを考慮の外に置かなければならぬ。斯くて言語斷續の眞義を考へてみるに、表現内容の不完に起因するものとせざるを得ないのである。即ち思想とか感情とかといふ表現内容が一

先づ纏がつき略完結せる場合には斷止し、然らずして纏の中道で未完の場合には依然として粗密波が繼續して居るのである。右の如く考へることが出來るとすれば、言語的接踵の斷續といふ外形は表現内容の不完といふことを表示してゐるものと考へることが出來る。つまり言語的粗密波は能記的なもので、表現内容の不完といふことが所記的なものであると言へる。而してかゝる斷續の法にはそれ／＼種々の形のものがあるのであるが、それに對應して又種々の表現内容の不完の姿がある。かやうに見て行くと、文法の事實といふものは語彙と同様に一種の記號であると考へざるを得ない。然も關係的記號とも言ふべき一層高等な記號性である。個々の言語記號は音列の映像を能記とし概念の映像を所記とする聯合體であるが、文法の事實はかゝる個々の言語記號の様々な結合狀態或は非結合狀態の映像を能記とし、種々の相關義或は非相關義の映像を所記とする聯合體であると考へることが出來るのである。

文法の事實は記號的であるといふことは今少しく進んで考へて見る必要がある。それは右に述べた如く、表現内容の不完の姿が言語接踵の粗密波的斷續として表れてゐるが、かゝる文法活動は更にそれ／＼特殊な形態として表示されることである。例へば「美しい眺」と言ふことが出來るが、「美しく眺」「美しけれ眺」などと言ふことが出來ぬ。之は形容詞的な屬性觀念を以て、體言で示される實體觀念を修飾限定するといふ關係内容を表示するには、體言に形容詞を連結する形を執らな

ければならぬのであるが、かゝる文法活動は先づ第一に形容詞の語尾形態で表示せられるのである。而してかゝる語尾形態は常に一定してをり、此の場合は必ず連體形を以てしなければならぬのであつて、他の連用形とか已然形などといふものを以てしては然るべき文法機能を明示することが不可能なのである。ところが、「美しい眺める」「美しい眺めれば……」の如くに、所謂居體言的であつた「眺」を動詞に還元すると、も早嚮の連體形の連結が許されない。即ち體言が動詞となると同時に、それに連結する形容詞は連用形とならなければならぬのである。かやうに文法活動とか文法機能などと稱せらるべきものと文法形態とは常に對應的である。即ち前者を所記的なものと考へれば後者はその能記である。ここにも亦文法の事實は記號的性格を呈するのである。故に文法事實の記號性は二重的である。その中、相關義に對する斷續法の記號性は所記面の方が決定的であり、文法機能に對する形態の記號性は能記面の方が決定的である。故に文法事實の究明は意義論的に行はれる場合もあり、又形態論的に行はれる場合もあるが、普通には後者の形態論的方法がより科學的であるとせられてゐるのである。併し文法事實の眞に具體的のものは言語接踵の連續斷止の法に在ることを忘れてはならない。

言語的接踵の連續とは如何なることであるか。私は之を第一言語である孤立的單一言語記號に對し相關的複合言語記號の構成であると思ふ。語彙的言語に對する文法的言語の生産であると思ふ。

第二次的言語記號であると思ふ。句といふものの眞義はかやうなところに在るのではなからうか。句に就いては種々の議論があるが、要するに句も言語的である以上、只單にその内容からのみ規定することが出來ず、又その外形からのみ規定することも出來ない筈である。内の要求に對應する外の姿を以て常に考へて行かなければならぬのである。句の成立の根本からその眞義を把握して行かなければならぬのである。かゝる方法に依るとすれば、どうしても私は上記の様な考へ方を執らざるを得ないのでないかと思ふ。句は文法の成立と共に生じた構成的言語である。語の表し得ない意味内容を表出する必要から、與へられたる語を材料として結體せる言語的要素である。故に句の内も外も文法活動が生き／＼として働き續けてゐる。句は文法の眞只中である。随つて句は文法學の中心問題である。句の爲に文法の事實が成立したものと云つても穴勝過言ではないのである。句を生産せんが爲に文法といふことが成立し、而して自餘のものが内的外的に文法的事象として存立するのである。

かやうに句は與へられたる語彙的言語を材料として構築された第二の言語記號である。構成言語である。随つてその内部は單なる連續ではない。單なる連續に過ぎないならば又元の單語の如きものに退化する。例へば「榎」とか「柳」とか「筍」とか「葦」などの名詞はそれである。句はその内部に分節がなければならぬ。斷止性がなければならぬ。勿論單なる斷止では句結體といふことも

不可能となり單一記號に分解してしまふことになるが、連續の中の斷止性である。節度である。特に日本語の如く、種々の形態的語片が觀念内容を表示する語に加接せられることにより活動する言語にありては、語とかゝる句分節とは明かに區別して考へる必要がある。前者は材料としての所與的言語であり、後者は活動的要素として今限定せられたばかりの言語である。私は後者の如きものを新たに節と呼ぶのである。岡澤鉦次郎氏の文素や橋本進吉博士の文節は略之に似たものと言ふことが出来るが、併しかやうなものは實は文の要素とか文の分節とかと考へらるべきものではないのである。小林英夫氏の辭は非常に鮮かな概念ではあるが、誤解され易い虞があるので執着を感じ乍ら今はそれを用ひないことにした。かやうな句結體の内部に於て語と節とを區別することは文法上極めて重要な事柄であるに拘はらず、之を曖昧模糊のまゝで種々の文法事實を論じてゐたのは從來の學者の手落であつたと思ふ。そのため、例へば副詞の如く機能領域の狭小な語にあつては、材料的な本來の語とかゝる語が特殊の形態をとり活動化され節となつたものとが混同せられ、前者が眞の語であるか、將又後者が眞の語であるか分らなくなつて来る。その結果只漫然と前者を語としてみたり、或は後者の方が機能が明瞭であるところから眞の語單位と考へ、隨つてそれに加接せられる形態的語片を語尾であるとか接辭であるとかといふ風に考へるのである。例へば「靜かに」「賑かに」「泰然と」「斷乎と」などに關する議論はそれである。私の考を以てすれば之等と雖も一刀兩斷

的である。即ち「靜かに」「賑かに」「泰然と」「斷乎と」の如きものは節で、「靜か」「賑か」「泰然」「斷乎」並に「に」「と」はそれ／＼語である。

言語接踵の斷止とは如何なることであるか。私は之を句結體と全く對蹠關係にある文法機能であり、文の成立する眞義はかやうなところにあると考へるのである。文といふものは如何なるものであるか。之に就いて從來種々に説明せられ定義づけられて來たやうであるが、少くとも文法學上の文はかやうな地點に於て考察されなくてはならぬのではないかと思ふ。語の集りと言つて見たところで、語群は必ずしも文ではなく、又單語文とか語文などと稱すべきものもあるから全く説明が喰違つてしまふ。之と反對に、論理とか心理とかいふやうな思想的方面から説明しようとしても同様である。例へば判斷作用の如きものでも、それが分肢的なものとなつてゐる場合は文と稱することが出來ず、又單純な情意の表出の如きものでも結構、文となり得る場合がある。單に思想として整つてゐるに過ぎないものは未だ文ではなく、句の一種に過ぎない。文も言語的なものである以上、外形と内容との兩方面から考へて行かなければならぬ。と言つて、言語と思想の統一である言表の如きものを以て説明を試みようとしても、決して文の心髓に觸れる所以ではない。言連鎖は文を單位形式として展開されるが、文は只それだけのものではない。文には矢張積極的な意義がある筈である。言の究極單位たるべく其の内容形式を統一する具體的成立因があり、文の本質はそれを中核と

して考へられなければならぬ。私はかやうなものを語接踵の斷止といふことに見ようとするのである。古來我が國で、特に連歌の宗匠等の間で喧しく問題にされた詞の切れといふことに文の生産點を置かうとするのである。

文といふことは、腦中に待機してゐる言語記號を適宜繰出して行けば、その一つ一つがその儘獨立した言表であるやうな、語彙的言語狀態に於ては全然問題にする必要がない。語彙的言語狀態では語即文である。文ならざる語なく語ならざる文はなく、發すれば即ち文であり發せざれば即ち語である。併し、心的内容が複雑化し文法事實の介入によつて語を様々に組合せて言構築が行はれてゐる今日、前者の如きものに伍して文が語の連續體である場合が極めて多い。否、寧ろかやうなものの方が常態的であると言つてもよい。此處に於て語群とか複合表象とか表現的統一とかといふものから文を考へて行かうとするやうになるのである。併し私はそれは反對であると思ふ。一體文といふものは言表が複雑化したが爲に成立したのではなく、單一記號的當初から存立してゐたものと考えなければならぬ。文法の事實は複合的言表の爲に成立したものと考へなければならぬであらうが、文といふものは言表が單一的であつた場合にも存立してゐたものとしなければならぬ。文即語、語即文としての原始言語狀態を考へることが出来るが、文無き言語現象といふものはあり得ないのである。然も語文などといふものは、文として却つて本質的なものと考へなければならぬ

い。語文を第一次の文とすれば、文法の介入によつて分析綜合的となつた文の方は第二次の文と考へられる。そこで文といふものの本質的核心に觸れんとする爲には、どうしても今日の複雑化したものから逆視する代りに、原本的な語文を出發とし之より順視する如き方法をとつた方がよいやうに思はれるのである。考へ方を全く反對にするのである。語文を不完全だとか原始的だとかと言つて之を蔑視するやうなことなく、却つて之を基準として文を考へるのである。從來は複合的なものを基として文の性質を考へようとしたから、その複合の状態のみに拘泥してゐて毫も文の核心に觸れることなく、只その周邊を廻つてゐたのであつたが、文の本質は先づ語文の如きものを範例として之を捉へなければならぬのである。然もそれが非文法的なものである點に注目しなければならぬ。内に何等かの文法的事實として展開すべきものを包藏してゐるかも知れないが、兎も角語文は非文的である。而して非文法的ではあるが文として何等非議すべき點のない完全な纏と言はなければならぬ。謂はゞ語文は文としての性質を最も露骨に表した文の一形式である。原始的であるが本来的である。かやうな語文の如きものを範例として、今日普通に行はれてゐるやうな、文法の介入によつて複雑化されてゐる種々の言表に就いて考へてみるに、是等が文となるにはどうしても其の内に働く文法活動を斷止するといふことがなければならぬ。言語の結合性とか連續性とか依存性とかといふ積極的文法力を閉止し言語的接踵を斷絶しなければならぬ。連續關係に一先づ終止符を打

ち語文と同一位相のものとしなければならぬ。語文が非文法的であるやうに文法的連帶の外に出て文法機能の極限位に立つといふことがなければならぬ。文法の圏外を臨むといふことがなければならぬ。その内實は纏まつてゐようと纏まつてゐなからうと、省略であらうと贅言であらうと、そんなことは文の成立に對して核心的な問題ではない。只かゝる内實の結合關係が終末を告げ、一先づ文法の活動が閉止して居れば、如何なるものも皆文である。文は文法から生まれたものでなく、却つて文法はかゝる文の内に醗酵したものである。故に所謂文法である。文は文法事實の極限的なものと考へなければならぬ。文は文法現象の宇宙であると言ふべきである。

文法の事實は以上の如く言語接踵に於ける連續及斷止の種々相である。而してかやうなものも社會的制約事實として一種の記號的性格を帶び、又一方かゝる種々雑多な斷續方式を指標する能記として文法形態或は言語形態といふものが成立してゐる。形態と言へば普通、屈折とか活用とかといふ如きものや前置後置の補助的語片等の實質的形態を意味するのであるが、その他語順とか語序とかと稱せられる時間的前後關係が、非實質的形態とも言ふべきものとして有力な地位を占めてゐるのである。私をして言はしむれば、前者は語彙的形態とも言ふべきもので未だ純文法的なものとすることが出来ないが、後者は語彙的な性格を一切超克せる眞の文法形態或は純粹形態である。一體言語が文法的となるといふことの眞の意味は言語活動自體が時間性を獲得するといふことに外なら

ない。語彙的言語は物質自然の如く單なる空間的散在として被動的であるが、文法的性格を帯びることにより、それ自體特有な時間性を成立せしめ、人間に従屬する機關とは言へ、被動を超えて自動的內面的となるのである。道具的なものから機械的なものとなるのである。而してかゝる特有な時間性は言語接踵の粗密波的斷續に存するのであるが、かやうな斷續の相を表示する形態中、最も之を純一に示し得るものは何等語彙性なき非實質的形態でなければならぬ。

右の如き種々の形態はそれ／＼具體的な文法の事實を統一し範疇づける傾向があるが、形態論といふのはかやうな事を取扱ふのである。例へば動詞の終止形は一つの形態であるが、それは單なる終止ばかりでなく、それ以外種々の機能を一して居り、又終止機能の中にも種々のものがある。形態といふものはかやうに種々の斷續の法、即ち文法機能群を統一的に表示する。併し形態は必ずしも文法事實の最高次のものではない。單なる形態論的文法學は、單なる意義論的文法學と同様、體系の中道に過ぎない。かゝる形態を統一するものは普通に品詞とか語範疇とかと稱せられるものである。例へば動詞範疇は終止形とか連用形とか已然形とか未然形とかといふやうな種々の形態的範疇群を更に統一してゐるのである。故に眞の意味の文法機能の範疇はかやうなものに求めなければならぬ。

五

私は此の論文に於て、文法事實の根本的意義を其の成立から知らんとしたのであるが、固よりかやうな大問題は微力を以て解決し盡すことは到底不可能である。九牛の一毛にも觸れてゐないかも知れぬ。併し兎も角この具體的世界を大地として、次第に文法事實の尖端にまで到達し得たのである。人間はこの世界の行動的存在である。行動するものとして我々はこの歴史的社會的現實に生きてゐるのである。我々は行動的世界の行動的要素であり行動的分肢である。行動は單に物的に行はれるものでもなく、又單に心的に行はれるものでもない。單なる體當りや以心傳心ではない。併し又物に心が役せられることでもなく、反對に心が物を作爲することでもなく、或は物と心との單なる結合の如きものでもない。行動は物的即心的即物的でなければならぬ。何處までも相矛盾せる物と心とが、相即不離の關係に於て行はれるのである。物と心とは次元の異なる絕對矛盾のものであり乍ら、然も心がなければ物が立たず物がなければ心が立たぬといった絕對相補の關係に於て行動が成立するのである。行動はかやうに物即心心即物、所謂物心一如の境に於て行はれるのであるが、之を具體的なものについて一々考へて行くと種々のものがある。それらの中で、物的行動と心的行動とが、顯著に相分かるゝ行動の二範類である。物的行動といふのは行動の主體が交換賣

買等の如く物的である場合のものである。歴史的世界に於ける物と物との交流である。心的行動といふのは之に反して行動の主體が心的なる場合の行動である。心と心とが相語るのである。而して一方、物的行動に於ては心的なるものが其の媒體となり、心的行動に於ては物的なるものが其の媒體となるのである。即ち物的行動とは心的媒介によつて成立する物と物との交渉であり、心的行動とは物的媒介によつて成立する心と心との交渉である。物的行動の主體は物で媒體は心であり、心的行動の主體は心で媒體は物である。主體と媒體の間柄は絶對的である。主體が媒體を侵すことが出來ず、媒體は勿論主體を侵すことが出來ず、兩者は全く相異なるものであるに拘らず、然も切離すことの出來ない關係に於て自立的である。具體的現象界は、常に主體即媒體媒體即主體的景觀である。

媒體といふと動もすれば副次的要素、或は主體の附庸物であるかの如き感を抱かれ易いのであるが、實は主體にとつては致命的のものでなければならぬ。生命であり核心である。心的行動に於て、かゝる致命的な物的媒介が一般に表現である。心的行動は表現によつて行はれる行動、即ち表現的行動である。表現するとか表すとかといふことは物が心に即くこと、反對に心が物に憑くことである。表現作用は物を一般者と見、特殊な心の媒物とすることである。心が物に生きることである。勿論現實的には單なる心といふものが孤存してゐることがないのであるから、心が古き憑依

物を捨て、より物的なものに生きる心の自律的展開であると考へなければならぬのである。表現から表現への移行である。心がより新たな物的媒介を求め、より物的に生きれば生きる程それだけ心が顯なものに開ける。かくして心的行動が表現行動として遂行せられて行くのである。かやうな心的行動には種々のものがある。その中行動的方向に傾いたものと表現的方向に傾いたものがある。前者にも種々のものがあるのであるが、道德的行爲はその代表的なものである。道德的行爲には外向的に禮、内向的に徳の如きものを見るのであるが、更にかやうなものをも超えて行かうとするところに、捨我沒我を愛し大我に生きようとする立場と無爲自然の堂に參せんとする立場とがある。後者にも種々のものがあるが、一般に之を製作的行動と稱することが出来る。製作の心的側面も物的側面も種々雑多であるが、その代表的なるものは藝術的創作と技術的勞作とである。而して前者の極限は形象を絶した東洋的な無の觀想であり、後者の極限は一切の主觀を排除し眞に物の客觀に立つ科學である。以上は心的行動を主體的側面から眺めたのであるが、之を媒體的側面から見ればその媒質的相異によつて千差萬別である。即ち聽覺的視覺的觸覺的味覺的嗅覺的、或は音響的形像的、時間的空間的等々。併し今は之等の中只聽覺に訴へる音聲的なものだけに就いて考へて行かなければならぬのである。

音聲は種的生命的なものであるが、之を物質自然界に放散せしめれば單なる音響とか物理音とか

或は空氣の波動の如きものであり、之を精神的方向に緊約せしめれば音聲表現の如きものとなる。併し音聲表現と雖も生物種のものに過ぎない。未だ暗き物質層の中に蠢めくモナドロジー的景觀である。心的行動はどこまでもかゝる物質層を打開して行かねばならぬ。それは物理音の上に生命的な音聲が成立した如き方向に、生理音の上に新しき音なひが創造されなければならぬ。併し物の名の如きものは只個人の記憶の中にのみ存続するものである。物理音や生理音などに比せらるべき、かゝる新しき音なひは共同社會内に於て生産され行く言語記號の働でなければならぬ。言語活動でなければならぬ。言語記號は音聲表現の如きものの物質面を能記とし、精神面を所記とすることによつて成立せる社會心理的な精神的物質である。音映像と概念映像との聯合せる比例關係的物質である。かゝる言語記號の活動に於て、その行使實演の方向が言であるが、言の外的側面は言語の能記に規制せられる發音であり、內的側面は言語の所記に規制せられる言表である。此の中言表が單一記號的な場合には只記號の所記面、即ち語彙とか語彙とかといふものが問題になるだけであるが、表現内容が複雑化して來るに従つて様々の記號を何等かの形で組合せて表出しなければならぬ必要が生じ、此處に又新たな記號問題が成立するのである。併し記號の組合せといふことも單に表現的必要からのみ行はれてゐる間は、それは只複雑な言表といふだけで、言語そのものは依然として語彙的である。組合せ關係が眞に言語問題となるには、之に社會的歴史的要因が介入し一種の記號性を

得なければならぬ。即ち組合せそのものが能記面で、それによつて醸し出される相關義が所記面である。第二次の言語とも言ふべきものとならなければならぬ。而してそれと同時に、結合性に對して非結合性が成立する。依存的連續に對し排他的非連續が直ちに成立する。種々の文法的事實といふものは實にかやうにして成立して行くのである。故に文法事實といふものは言語の斷續法であると言ふのである。言語の依存排他の組合せ關係が社會的歷史的要因の介入の爲、方式化し記號化し第二次の言語乃至は高次の言語となつたものである。此處に於て新たに成立せる形相的な文法に對し元の單一的記號は資料的となり、言語は文法と語彙とに分れる。

言語活動の原始狀態は語即文、文即語であつたと考へることが出来る。潜在的には語であり顯在的には文であつたと考へることが出来る。所與的には語であり、行使すれば直ちに文であつたと云ふことが出来る。併し言語の中に文法の事實が新たに成立すると同時に、この語と文との中間に句といふものが生れる。句は形成せられた言語である。語と文との中間に語的なものとして形成せられるものである。故に句は一面に於て語と同様所與的材料的であるが、他面語を超え分析綜合的なものと考へなければならぬ。結體されたものでなければならぬ。随つてかゝる句の姿體は分節的である。語や文の如く、句は單に總體ではなく分節せられたる總體である。此處に於て句はその成立と同時に、内部に節と稱するものを有つ。併し節は句の部分であり要素であるが、語と異なるもの

でなければならぬことは言ふまでもない。句と語との中間物でなければならぬ。即ち語は未だ特殊機能として發展せざる靜的狀態であり、機能の潜在狀態或は待機狀態であるが、節はかゝる語が句結體の一機能たるべく特殊的に實現せられたものである。而して語の潜在的機能を顯現せしめるには、語に然るべき能記を加接しなければならぬ。語に形態的工作を施さねばならぬ。節の外形はかくして意義部と形態部との統一であるのである。此處に於て形態といふものは又節と語との中間物とも考へることが出来るのである。かやうな形態を言語の最高次の要素として研究せんとすれば形態論的文法學が成立する。併し形態は必ずしも最終的なものではない。語と形態詳しく言へば意義部と形態との間に機能範疇が介在してゐるのである。言語を動かす最高の力にかゝる機能範疇に在る。文法の最高事實は機能範疇であると言はなければならぬ。形態は未だ統一せらるべきものである。故に文法學はその最終目的をかゝる機能範疇に置き、而してその機能範疇を以て雑多な文法事實を統一し展開することを念としなければならぬ。